桜桃栽培の先駆

ふるさとの誇り 190

博レポート

昭和初期の桜桃（サクランボ）の木箱（ふるさと文化伝承館にて常設展示・市民より寄贈）。黄色いラベルには「西野産業組合」とあるので昭和８年以降のものであることがわかりますが、側面には大正時代の青いラベルが使われていて、「甲州中巨摩郡果実組合」の部分を切り離して使用していたようです。

ラベルが語るサクランボの歴史

木箱のラベル。段ボールが普及するまでは木箱には手描きのイラストのラベルが使われていました。今では「昭和レトロ」として人気が高いようです。写真のラベルは実際に昭和の初期に使用されたもので、南アルプス市の桜桃（サクランボ）栽培の厚い歴史を証明しています。

御勅使川扇状地での果樹栽培の本格的な取り組みは明治二〇年代後半からとされます。「果実郷の父」と呼ばれる西野村（西野区）の小野要三郎氏は、明治二六年頃から李や梨、桃などの果樹栽培を試みるようになり、明治四〇年～四四年にかけて西野にあったカラマツ林1ヘクタールを開墾して、生業として本格的に桃・桜桃・葡萄を植えたとされます。その頃から大正時代にかけて西野村全域で桃・桜桃・葡萄の栽培が急激に増え、特に桃の栽培は軌道に乗り、春にはまさに桃源郷として花見客で盛況だったそうです。

小野要三郎氏は成功した桃の栽培だけに収入を頼ることに危機感を持ち、大正２年に桜桃の栽培を本格化させます。要三郎の息子の義次氏と在家塚の中込紋蔵氏が山形県の試験場の斡旋により、山形と福島で、高砂とナポレオンの苗木を貨車二両分（六百本）買い、西野周辺地域に移植しました。※1 白根地区、さらには山梨での本格的な桜桃栽培のはじまりと言えます。

危険を分散させる思想

小野要三郎氏の説いていた「危険分散」は、一つの品目だけでなく、５月の桜桃から始まって、晩秋まで多種栽培をしてリスクを分散させ、順に収入を得られるように家ごとに栽培品目を工夫する考え方です。その後起きた大正九年の大霜害と繭価の暴落はその考え方が周辺住民に浸透するきっかけとなりました。現在でも、小野要三郎氏が「果実郷の父」とよばれる所以です。

多種栽培という選択は、御勅使川扇状地に生きる上で培われた、情勢を読む力であり挑む気質にあると考えます。桜桃などの新たな作物への挑戦を生み、さらに先駆的な試みが続いていくこの流れは、まさにこの地ならではの気質と言えるでしょう。

春、スモモの花の開花を皮切りに、次々とモモ、サクランボ、カキ、ブドウの花が咲き継ぎ、果樹畑の花の彩りが次々と表情を変えて現れる南アルプス市。花々の色が織りなすグラデーションは多品目の果樹を組み合わせて栽培している南アルプス市域ならではの景観と言えます。そしていよいよサクランボを皮切りにみずみずしい果実たちが実る季節がやってきます。

写真・文　文化財課

※1　白根町誌より

西野　サクランボ詰めの様子

奥の箱にあるラベルは大正５年以降のものだが、手前の収穫用の箱には「メロン」のプリントが見え、大正末か昭和初期の写真とみられる。既に多種栽培の様子が伺える。

果実組合の設立

大正　５年	甲州中巨摩郡果実組合
大正12年	西野果実組合
昭和　８年	西野産業組合
戦後	西野農業協同組合

山梨で初となる西野地域で栽培された桜桃は、山形に比べると10日から2週間ほど早く出荷できるため、市場での人気を独占でき、販売上有利に展開することができた。

個人それぞれで、名古屋や西日本方面へと出荷していたが、より安全な商いにするために、大正12年、組合員数49名からなる西野果実組合を設立した。

ガイドブック「にしごおり果物のキセキ」

昨年、ふるさと文化伝承館で開催されたテーマ展の内容を中心に、南アルプス市の近代果樹産業の歩みをまとめたガイドブックが刊行されました。ふるさと文化伝承館で100円で頒布しています。